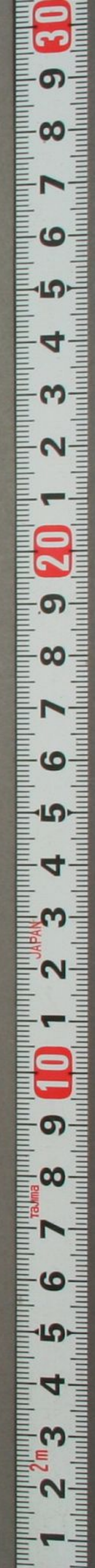


佛語三部抄  
 佛語大概  
 卷之始大略

上卷

中村俊定文庫  
 文庫 18  
 85  
 1



逸空藏

俳諧三部抄序

於乎音高什麼正身くく

備有大佛前雷益其目

不勤而鳴渡世無不聞之

有破為冷眼吾衣擗其

善鳴者而假之鳴者誰也

一時汗東道惟中子之鳴

信善鳴吾又越有人被

之捨電木之木坊主團會

茲与友善吾言誅物

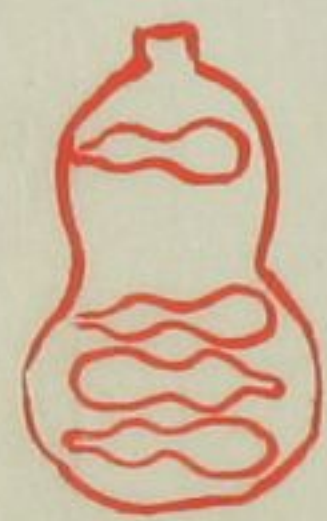
巨類聚之謂自然之理  
所然而然亦然也于時  
袖於所自撰自書之俳  
諧之部抄未采括乾勉  
幸而為切也多寡  
言證親王以筆圈拾根微  
熟穗而免虞其藝之青  
若輩守待 次具慶  
西相之頑於傳按妙勝種  
而成番椒子之赤名人皮

自若研碎乎三國之書  
如將因而平壞其寓言羨  
檢集十方之句如夢而細  
濃其滑稽聲以彼言集  
種而和雜是書使苗華  
周真人於甘口 拍舌  
較感人念忘木四知信於  
味腹○○扣胸板嘆誦  
詠德之者必無出唯中  
子哉中子外於又中子哉

俳諧、活枝不<sub>ニ</sub>才子<sub>ニ</sub>喃<sub>ヲ</sub>猶人、  
不識<sub>シ</sub>喃<sub>ヲ</sub>

這箇秋暮、傾於垣、孰  
算水滴、米之自<sub>ラ</sub>落、為<sub>ニ</sub>  
穀胡蘆、々々、笑而已

讀唐履之菴



俳諧三部抄



俳諧大概

作意<sub>ハ</sub>先<sub>ト</sub>為<sub>ラ</sub>先<sub>ト</sub>、求<sub>テ</sub>人<sub>ノ</sub>未<sub>ダ</sub>言<sub>ハ</sub>之<sub>ヲ</sub>

心言<sub>ハ</sub>之<sub>ヲ</sub>

寓言<sub>ハ</sub>笑<sub>ヲ</sub>可用<sub>ユ</sub>、詞<sub>ハ</sub>不可<sub>ク</sub>弄<sub>ク</sub>云

因<sub>テ</sub>之<sub>ヲ</sub>書<sub>ク</sub>、守<sub>リ</sub>武<sub>ノ</sub>宗<sub>ノ</sub>鑑<sub>ヲ</sub>梅<sub>ノ</sub>翁<sub>ノ</sub>

出<sub>テ</sub>之<sub>ヲ</sub>用<sub>ク</sub>、新<sub>ク</sub>古<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>相<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>

小<sub>ノ</sub>亦<sub>モ</sub>同<sub>ク</sub>用<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>

凡<sub>レ</sub>解<sub>ル</sub>可<sub>ク</sub>効<sub>ク</sub>、古<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>上<sub>ノ</sub>子<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>亦<sub>モ</sub>逸<sub>ク</sub>

不<sub>レ</sub>論<sub>ク</sub>古<sub>ノ</sub>今<sub>ノ</sub>遠<sub>ク</sub>近<sub>ク</sub>見<sub>ラ</sub>見<sub>ラ</sub>、寓言

解<sub>ル</sub>可<sub>ク</sub>効<sub>ク</sub>其<sub>ノ</sub>凡<sub>ノ</sub>

尚<sub>モ</sub>時<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>人<sub>ノ</sub>之<sub>ヲ</sub>俗<sub>ノ</sub>而<sub>シ</sub>、瓢<sub>ノ</sub>字<sub>ノ</sub>詞<sub>ハ</sub>魚<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>句<sub>ト</sub>

謹の除棄之

此比意分入声之 スツキリ

カツキリ 如此之堅指詞 キツタ

クツタリ 字性以詞勢不の取用 キ

於古人句多其同詞言之最

為不若但取古句言新排子

十夜之中及五夜能立取案

十夜之中一句二句勿之於

思ある子簡之 セヨラテ 思事作其

取子不為 ラルク 當言 ラ 成念 カ 考

物語言物語 ラ 史 ラ 漢 ラ 言 ラ

史漢言軍記言軍記 ラ

以海詠腫物膿以詠泡瘡山

以鐘詠巾着 ラ 銀 ラ 以詠丸菓衣 ラ

如此之時 ラ 取古句之難 ラ

あふくもく久はりのね

ゆゑるをまののこ

あまののふ久る乃月

お鉄炮乃玉ほこのる

あさめくともほくもす

如此之平句言物語 ラ 全 ラ 金 ラ 留 ラ 友 ラ

不悖之 ラ

醫林度友

年の中を木にきく桂のぬ

道好真德

月あゝぬ我乃かゝる教法

也昌坊字存

白屋ややに志れぬ雪乃岩

高木田字氏

世をえおほほろくともあはし

此之春句と類る人子

魚石字の猶也

昔観古句之寓言の懐心録

可見習者古人之付句伊勢

書氏子句後梅翁五百部

三十五人の中上句句解

下巻心山詩字濫天五右左寸

伏見任口貝原於山田女子亦之

教也魚非佛語本時節第章

世間付道為知物分在子原氏

信昔の振殿 亦有佛語志

佛偈世師近唯心寓言句為

師法是古凡習詞活達者

誰人不就之手

俳諧発句之躰大略

随寓言之覚悟書連之

部々次第相交狼藉無

極者子

春部

元日

忘木内子武

花梅や久くくも秋のま

七十歳のまにあひて

雨ふ梅の

中初や七中歳半梅あ位

松水貞徳

あはれこころなきふらふら

読人不知

蓬萊の山をこふまことちや

野任口法師

をらんみや唯大く乃まういの

夕陽菴道寸

梅や先月や先年くそ物れま

松山氏政也

いよふ寝て起あふこり物れま

小お孝吟

をれいこやけほ代を社をれま

松江雅舟

得ぬ所之方ねやいてあめ



梶山保友

長閑や是てこそ万事を物成

高淑梅盛

君ありて誰よりあつても子成のま

阿智志郎成

誰波に埋れぬ名や奉りつ

南氏元順

世にふれおや子もふ太即月

井口氏如貞

初夢や合しせば八中成

言滝益お

海に入るれうらや天下のま

前河由平

髪を刺扇あつしと物成のま

石田未得

されふやつあてりまては成のま

高沼玄礼

せいひつは武具や治る清成のま

一孫水調和

されいこそ人わらひなり老のま

高井立志

とせものに麒麟も出ん成のま

藤子貞重

し田のぬき人あると天りま

高野山

不二の氏のおまじにほくしん

隠者以て

新編の文さるや君の妻

高野山

ふれし事よのすまも君の妻

神田まは

君とわが言あしむは氏の言

岳を御及

席はいく百袖の宗也善恵比

寺地志五菴

うたよられ虫の茶麻を老は

伊木氏正休

るげめ礼儀三百六十日

山口氏非

かこる長息とや屠蘇は酒

木畑定直

万寶や代乃集は花再

古聖中

みかこや流とそまはる松竹

子葉常仲

禱<sup>エリ</sup>身<sup>エ</sup>重人あつうと善花<sup>42</sup>

山口謙也

神うやあぬさす日の正月<sup>42</sup> 紺

竹下氏竹子

とつや若く世をふかぬに侍竹

回氏撰付子

羊紙紙やよりあふふ如

有松文捲子

日胸もや一歩はけしむと物なま

親は卯

おとせやふか切徳乃林門の松

如流は師

東くや太平日中しと物なま

吳意はし

あゝあゝあゝの桃子や児酒酒

岳色計祇

止園や竹子乃乃猶のつれ

架古任有

かゝらや三日物て門乃松

鳥井貞清

うゝい初や若同とつふ申の年

藤原秀倫

大ゆのゝちあゝんを物なま

石原氏正成

かゝらや五百い十七ゆり

岳存孝者

く様やこひし和物乃筆はけめ

蜂屋新中

清代々金大堀出を免くま

段四師瓢中

あひねおや照<sup>ヤ</sup>景<sup>ニ</sup>とて門の松

あまを左金

万代やいほせをいそふ代のみ

山河利次

大やい人あつすこいふ

かほ定伝

ふまのつる引するやうけめ

桑原景約

蓮菜の山ハ八木丁こり

鰐者玄興

礼法や枕林こつあぐ丑の年

清水定匡

法代のあらう蒼もとるれ傍竹

万代栄立

善やふふ中<sup>中</sup>の天地ともの酒

形は京之

大やう浪回みやあうり

子原三餘

火蓋をりまはみりや者

中務由也

井初やあめの送洋書<sup>書</sup>の海

石田氏長尚

万物もいさよのありけいぬのま

波多勝正

古木をもし新くますや門の松

上田草敷

曲を養ひ定海はまふ試管か

辻氏自取

君は舟ちやんを舞ひり此代のま

松河清栄

春の礼やおまへに伊勢とお五原

山平一之

門くや茶池原田く松がさう

飯田利久

木は竹もついであがるし門の松

藤原貞因

礼者もあつもの同儀むのま

金万氏鳳子

けり砂や前繪よ見ゆるまかきり

羽吟法一

狼もと物や衣裁きまをけりめ

藤田不琢

君は八子代我欲くし首のま

腕取氏在土

等教や止哉天曆清代のま

宥利可也

火のやりきりあそび三百の巻

高橋一巻子

大和のやりのすしれとまゝ

小松原半巻

竹のまゝついで松のすゑやちほひ

高橋の巻

老翁やと新巻の佩初

雑巻有中

門くや口よの一話礼けめ

伊波政章

手紙ひとつ門松の陰よりあふ

吉田忠服

女のおめいこころのまじり

石田益水水

本家よおひよあまの初ま

玄甫法師

めでたさうあはれうらあこのま

高橋正辰

女初やこのうけつる巻の海

坂上三郎鳥

後ふるの巻園せうとされる

高橋重直

よま王の送様もあはれ

市松鉄丸

遊業に万物のこもれ野あり

湯河津松

魚網を魚木よとる業多し

仙石氏鉄口

門松やまやそ私毛を傍る

清家朱木

方引や八百一代の神のま

回ち字付

今よもる夏の正月やまもら

北見深桑

やり羽子よもるつぎ子のま

村お疾丸

花開こや長束のうねの声

武田一矢子

土大根あられ出 雑煮小

に田氏吉右

三階の皆我有也花ひき

廣田貞之

ありの様はとおもふへまらひも初

金あ九郎

しうひも立てまらさや門の松

素門郎雲

一鉢の米や羨やまのま

大元元重

三國城やうけしし雑煮

丸河のふ松

蓬萊や山も動せん若うま

秋山樵艾

皆若い姿あすやふのま

秋庭順唐

花の戸此雀後と祝あめのみ

難波玄ま

二まふふ代を米やう花開

長崎正辰

墨やよせを押うつる若恵比呂

依木ま

上下も長知順也まゆり礼

胡鬼子 一時将惟中

けしとわと定こすめくまうま

一時将書順

羽ねけくや三羽四羽の扇とをれ

具足餅 玄甫は

りあまねくしんく望し具足餅

子日 や福道七花

引のこはねを固志の祢のひは

市お鉄丸

紙してや引もあすの娘ふ松



お作あ四山

市場一平兵

ひげやむけあつさ山のおと松

若菜 前川由平

白味噌やきんはくめら若菜

かき古任有

摺山木のねよ音すまみ

お堅中

むらさきかきけあや若菜

大お意秋

ふや七日七仙以後の佛乃在

鰯

竹下孝相

酔よむの物くの声金衣鳥

三編如及

常と竹葉さいさやの乃色

よみ人志

常よ妙の一字の儲いり

おあ お田氏生成

まら服寸園ち一魚のあふ

お赤石 素門延海

ほろくと五文字おれあふ

三宅園久

三好野のあふすみのお利

金万風子

天の戸やひらけぬと云ふ處

播磨楯保乃河の記に此

云とて 一時新惟中

著やうしふにわさる横子み

於新野百元水色を更

真行

吟すや新野に起新雲霞

美雲 多紫常仲

云の日ハ雲よおとく女もあし

市お鉄丸子

山の女川乃ちくれや雲をくれ

一時新惟中

云よあひしそく鮫也小葉雲

梅 曲院新有中

又ある風郁子とて花乃兄

お宰相府 泉郎子一三

梅さけはさし中も白ひあころか

新木氏似笑

咲げく梅やは江 數十系

榮原榮期

投入や梅をいおや寸竹の筒

兒得氏家女

志ろく咲や廿四番乃をの兄

上野和序

安し後や木男とあるを乃兄

伊原光明

ちり果て後いふはれ好文本

播磨曾祚の社司帯原

民部が捕負強と尋し

比雨のありをれそ

一時新惟中

比つを雨うねる梅の笠

木目 休あう鬼氏

木の目とるくひを照るか

猿木

池上元定

存立て而美あり陸穂小

お比あ一向字南枝波

真杉 一時新惟中

南枝波次才相兼の陸穂小

士管 一計法一

了捨師一の字武風をれそ

山田氏知恒

是是 是 是 是 是  
是や又は一の字はは

大お代を秋

からあらしあつてさあるやうに

火うしとよあそろを

素門可吟

あつしよあつしよ焼野火

喜多 秋山樵文子

野鳥のうつは代はえりける穀

勢あ花智

花はあなまはれこれ梅茶

海苔 秋山氏政也

神鳥藻も海とやとるあ戸若

於紀あ和方浦

伊勢村道朝

浦の名をとる取すらわめ家

わらひ

可吟は

是とるまは是を口すらわめ家

秋山樵文

物陰や燭の目よせぬ鬼わらひ

一時好帷中

孫やあふ塵の美梅園やひけ

新能 秋山氏樵文

神子能やま日の里よ知りしレテ

涅槃 伊木氏正休

くはりの起るまを涅槃像

お川定流

竹さくあやすそねん外

祇原探賀

鳥けの陰やふく暈梨像

由人真好真

暈梨りの笑仙もあまうれ

お女写山法を神まて

正像末三時のころを

一時好惟中

暈梨像末法すての記念に

法然忌 増上智鑑

念仏やゆたしうまは法然忌

曇雨 井上常之

雨ふとも春のまこと長柄か

春日 脇坂朴之

やあしそおろろづきんれゆあを山

栢天道智念

照もをぬい雨はほろくおろろ月

木畑玄如

暈月と難波のあやとらあし

鎌子 平お龍孝

ひねもすよんくくや鎌の声

ふなふ常仲

鎌よりあ其廻<sup>子</sup>者やゆり枝

菅子 お原忠之

生あし忠をつひまや菅の子

三宅田久

一法子わく成守富やすめ女子

楳貝 山田氏家之

何〜まの二海をも踏や楳貝

飯蛸 福田氏正武

老正蛸や飯久取て料理福

伊木正休

飯蛸やひちりるあ〜く〜り

塩見関矢

飯〜こいもの外あ〜く〜く〜

板 木畑定直

浪うちるや両岸〜として板腰

素門主お

浪あすいゆあ〜新〜河柳

伊木も堅

甚遠く柳眼〜れり君の糞

加古仁有

薫薫枝せん〜く柳〜ふ

小田氏山子

起もせに寝もせして〜り板〜

伊木氏正休

は〜る起あす〜眠るや柳髪

一雨好惟中

梅〜んつ柳〜まぬつ雲の風

躑躅

難波言ま

春の風をちたれく岩つし

小見梨葉

よせつとあつとくし光ほし

藤

榮原榮福

三尺八山ありき一坂の浪

上沼和所

坂波を立をり記せれと松

横内末祐

おと松のさうり所を坂の陰

市お祐九子

はり弁やゆくれを志坂の枝

原より直

市をきよよこまあえし坂の門

山河利以

家のやろとやや海けさか

伊木正休

藤の棚や浪をもよ見上被

陶厂

西河原弘氏

秋の音は鳥を久す田面所

伊木氏正休

八月日くんあんいた天津厂

送れよ

山田家之

子よびつとを紫城まる厂もふ

吉田氏芥舟

等類や鳥、古句より取らり

蛙 三宅因菴

水よりふくまへくやあま久保

一時好懐中

さふあのをこいけりあれ蛙計

空にたあごころあさつ小

道研 平井色々

重箱や一をひくれば道もち

市本鉄丸子

けし時をよきあろよも記もち

於旅宿真行

金地丸世

と物くあやゆくの松葉乃餅

伊木正休

と物くこも道り洞も葉れもち

野田可糸

包丁やまききゆりの道もち

水河氏一色

道もちまき香おちあきまき

ひあぢ云 山田氏七道

眼箱や化粧を弄むひあぢ云

紹閑 山口氏昨水

有やあや京よみくぬき合



沙門不好

はあははや流前よ為て紹合

柔麻義解

あつたををえあそおそや鳥合

於神前 山田氏家之

神あやひとつおましくとり合

一時将惟中

時を感しをい鳴也とり合

紙鳥 伊木正休

わくの糸や凡わつてとくこのなり

原氏より直

そまよ入る風よまよふいらのなり

字方如也

からあつて風よ柔すそや風や鳥

如に宗と

や者として天よ知はや成り也者

平井也也者

揺くところくあそやいらのなり

岸氏も晴

玉の緒う引まにゆ〜くいらのなり

湯河岸松

風やみ跡水あきせれ風や

山口氏暇非

らあまよくやまよいらのぬいのみり

古盤中

人の心をあはれむいのわり

一時行帷中

いのわりみあはれせ終ひなり

花

ふゆあきあはれと花乃雨

此句は鳥花西相と云

梶山保友

春雨の急作ほは是は花

木畑定直

花のまにけふと花は日暮用

お祢あ

柴門則玄

花に鞠是も社壇とけふ花

本氏准松

花に鞠あはれくつふあいの

石田益水行

海りの音は掛同とあや花の庭

お吟はし

花のなほ七日も中あ花は垣

伊木正休

花のつへし論カキとすあ花の門

古盤中

花を好くあはれもけふ花はあ

山口氏此非

友人よ二のあむおむの宿

江田氏吉右

女よ一そま六梢よ作まむ

池田豈休

日の足も志ひりをさしせを盛

森原昌隆

告口の使わゆきをむらり

武久持保

忠峰やむを尋えふりて

丸河信祐

一技を盗心あつんをむらり

14

左の挨拶

坂氏正静

志んをもてゆりてえむの友

お有馬鞍跡

とみ介一守

旅人もあふりてむらりむの滝

一田好むりて具行

金出地正載

碧たより栄枯一時をむの宿

お醫家真行

吉本法師

尋ねる諸方の初まむの宿

味尚如之

多あけりやあはれある衣

九河の少松

ちりめんや目あまけりてを志

石舟如自

養生よををいも病りか

弟加氏ふ計

花の多じつうつもの人群集

石田休多

焼七を水ふあるをを風

竹下常相

出てゆえん心瓢箪子やを見酒

市村鉄丸

餅もうれ斗練の水此を見酒

河小冷多

くはれ其巾襖よあや花見酒

仙石鉄口鉄

大蓋のみして作を酒

子多ふ三餘

たうあて城と者はやを酒

八木のおき

十右串の鳥とくやむつを酒

目下三子

むせりんあや情おぬを酒

板野万三

一升を凡の前やを見酒

素門正引

小舟の文字さへ海はらりちる酒

野田のくお

を見酒や一升くく夢のおき

仙石氏鉄口

を酒やまた魚はまてのこ

をのりけり 詩のこきり

ろのこきりえ

辻自取行

りくちや胡柳丸飲を見酒

藤原貞用

大酒やいささ浪のをよのこ

曲院将右中

酒樽や古木といくをの法

竹屋を辰

をよ宗や並お收然樽の酒

沙門お吟

をよ酔やへくく念もく胸いさ

ま弁合真

狂酔や是盃觴のを乃時

宇高如也

照降を天もをよ酔くも

古地壺菴

をどの月よあてし諸上戸

井上屋計

小倉や留てふも大上戸

雨尾似舩

をやらあましくり大上戸

秋庭帆菴

日はをに諸白くあゆゆ之小

坂部胡弓

わいのせうつらかねはををい

子紫常仲

をけり尾上のふれなすや

丸河の少秋

ひきにいをやわむむ鐘の声

福ふ真行

法家朱木

ををふむとくを身捧もあ

水野如水

ををふむ鳥の宮能無礼うれ

土岐源弓子

ををふむおむの喜は足跡ハ

吉沼一登子

ををふむおあし緒志むわらふ

名不ふ真行

八木仲を

をやしむひのまに比良の山虎

お悪名 加河氏定のふ

念仙のろく地よりや峯のを

淀の城中をさうよ

任口法師

白き事流珠の白壁付るを

一向宗止ま

曲肱将有中

をさきつてさんさんとする白か

一笑子止ま

柔麻昌のふ

差や美人形万るゆりを

岳本武村昌

提重も山を開くあめか

山口徳也

提重を粉をかゆるをんか

お於野腕坂玄番元朴之公

亭真り

一時野帷中

さん家の風月まよるをまろ

お曾祢名木の松一見

し

志せんと終たれもを磯磯朝朝松松カカ

お作が卯名提法具行

花やまのついでにうあてのよりあて

梅 雲飛和尚

うれぬさうも仙性あし物さへ

山口氏昨非

のひぬらやの又れ目の犬さへ

伊木正休

老樹もや疲さへいぬ梅

素門ふ好

上戸をわらうまもや系梅

東河系云孫

系梅美京よよつて一ね山

大平直仍

志さひれも世とらつげよ系梅

山田法成

花を雨おてくくや米らへ

延原忠俊

くめや酒ひらよのうねらハ梅

か河氏定の

忍り梅わつむうおや左折

お祿前 大谷随友

山さへびとよ南社のはな也

西木氏知自

ちれはなちちひらの山乃梅分



三木紫舟

破子やうのものもせえん児梅

原氏正武

花根留てさくまひれ姥さう

東河原景家

若いれよあれやうすら姥さう

雑笑有中

あしを切ふ鏡祖父姥さう

永滝似玄

とこの尾に風うれ少系手梅

山田法成

こま梅や外のらあんはこのこ

曲肱折有中

とこでさういんまあーとまさう

市村鉄九子

よき雨や面のらう家梅

萩原光重

出家もやをよい出ぬ家梅

山田忠道

よその日にひしり魚出せ家梅

伊木氏正休

日の嵐つけえしえさけ家梅

桂カ氏政長

人やあちちを垣つれのを梅

宇河長康

あふはの橋よとや人ふり

志堅中

志堅とけりてるとよ人や橋あり

板垣戲言

矢当やゆりあまの山ささ

柳野 仁口法し

栄由守り上野下谷もはな橋

おち野 志堅中

緋さくらやそとつ越て奥の坊

お橋お栗か山下佐次

自悦亭魚り

一時好惟才

竹むみややうとれ山ささ

お新野法を寺野吟

法師とあ吟して

法のを乃ち林とささくは

橋綱 池田氏宣休

かほりこや摺粉木まをの橋い

九河のあ松

あれいそのとけし酢橋い

河内氏冷茶

かし酢鼻はな多橋綱

有松支枕子

汁椀のこけ同まもろ椀い

お上栞友

鍋の中やに身もちり椀

告原知足行

四り又もえちりくはく

岳本流及

見おろすやあももろの椀

竹下孝相

庖丁ふちろしなちく

詩人のくろくえ

井上望計

湯はほれし句あしし椀

お上まか

をよの道やまもろ椀

竹下竹子

早すやあれむうのさ

市お鉄丸

うす塩や雨とあもろ椀

伊木又賢

春の葉いしくあもろ椀

丸江松祐

わろみよものあもろ椀

清や法

さくちあもろ椀

过氏自取

都、去の縁乃とふやけとて

溝部倍笑

あの浪れりあにちや梅とい

平井の孝

穉船やけいふへんつれ梅とい

山口徳也

献立や文成あつ高きとい

土波氏諱

梅とい釣のいふや教生戒

吉原知是將

ちぬ鯛は是もすも除さくとい

一時新惟中

勝多口やほのくふさとい

若転 八木氏の子

皆美の姿ありく歌山あや

雑言 寺地土壘菴

武士の八十字流川の海老エビ赤アカ

一扇將以志

わの原は生海嵐とともむ女浪メナ

お仁者 森氏准松

すみや志をひ垣つ貝乃イノ

桂氏政長

らううらうらりりきき大徳だいとく立たちち風かぜくく後ご

丸河の少佐

七やうすほつともなえ麴むろ

賀古氏恒有

草物工是や志かめねをうふし

素門ふ好

彼岸にたるんふ壺子のま向か

藤原貞因

かづりを赤前<sup>あか</sup>づれせあまきか

佐木井中

あかねうちれ耕<sup>か</sup>すも新<sup>あたら</sup>か

お津か 岳<sup>たけ</sup>つ隅

精<sup>せい</sup>ねやみとのゆきまいつり信

丸河の少佐

ぬう味噌やのくは老のあさえんか

お社頭魚<sup>いし</sup>り

語家朱木

美<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>の飯<sup>い</sup>あつて賑<sup>にぎ</sup>ぬき舟<sup>ふね</sup>に

大村意秋

ふふあめ<sup>あめ</sup>の糸<sup>いと</sup>まがね<sup>まがね</sup>ま白<sup>しろ</sup>水<sup>みづ</sup>

於<sup>お</sup>備<sup>び</sup>中<sup>ちゆう</sup>吉<sup>きち</sup>備<sup>び</sup>澤<sup>さわ</sup>ま

伊木氏正休

ほろろ<sup>ほろろ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>鉄<sup>てつ</sup>提<sup>てい</sup>やまの<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>

梅<sup>うめ</sup>の<sup>の</sup>び<sup>び</sup>し

晴<sup>は</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>む<sup>む</sup>す<sup>す</sup>あ

池上宗昌

鳥の子と十は、十や百子鳥

辻氏や桑

傳更せねとおかつ多や呼子鳥

淀屋言苗追悼

志子宗也

さめより人同万るまの夏

味巧得

鳥の巢やちりまうる神社

白宗具り

所好惟中

此孝よすむ鳥の巢や穴貫

俳諧三部抄

夏部

文衣

子孫正仲

去を友よめてはけり久しはれハ

と聖す中

家の祀又その日程あをせハ

河合鞆中

友衣老少とつてを別ふし

三輪好道

質屋も三百さうりや衣之

五十おを貞

れをとおしやりうう、友あも

清水定直

美 善いつつひつり年とあつた

壬寅 五月人日

壬寅月又もやほれぬらん

神宗中よすめる後依の

身行よ 山口服非

清くや老傍の上れ衣久

お明心 不智法師

清くあつて襟うらむ衣久

醫師のまこと

山口徳也

丸茶やれを開くあつた久

沙弥の還俗せりつれと

なして花鳥并景雅字の

あそびやうとらん

還俗の名つきにせし衣久

梅翁けしは雲和尚

戒授り竹娘と圓て余ふ

のあははる衣久を祭句

うしてはうらぬつりり

ろの句ニつとすことも

あらんすまこはやま藤花

あしてせあつ竹娘文の

げりうららん

西岸寺任口

垢膩乃あり早をきしう衣之

梅の清しうあひて

一時行帷中

お僧正あふくまのりるる衣之

お大津真行

若あえ衣之ねえ河浪袷志返

新梅

寒河長康

友山やまきき服乃ゆふ詠

晴坂氏朴之

蝶乃葉やはくまをさる友木立

三宅好久

何くわの土てのうねや友木立

志云享真乃

一時行帷中

茂くまのふは昆虫塵沙和乃指以

新茶 好吟法一

壺乃中天地味和乃新茶小

上沼氏和序

新茶もや一休衣を身のうみ袋

久遠よお飛沫起清とある

語をとめて 有松支枕子

沫をとけ浪をよめて新茶小



雑歌有中

天目の古きをもつて新茶か

茶架招き和尙のもの

うして 一時将帷中

天目よりろくろつを新茶か

八幡う訪て茶店の下

くろやきひて

男山よぬてりとおもふ新茶か

時鳥 山田の女子

なくとはわらひうり時鳥

お淀 梅翁法師

淀舟えわれ付合そほとてん

竹下竹子

五月雨や定むるなれとも時鳥

佐木を笑

馬ノ角やけりてまけはるる

孫屋文昭

晨明の月や夏してむとてん

伴木氏正体

みくちのいささのれ郭公

河合氏頼中

結成ては翼の鳥を郭公

仙石鉄口次

さけい茶若やまにけり杜宇

辻自取行

枚原の懐奥よも待や杜宇

野間紫虫

ほてらうのむけのまき子親

古ぬちや中

うら人乃耳に想はのむき守

一時将亭 隠者浄林

初声や子れのうもく富禊

府利了存

耳搔や拵ても忘れず郭公

宇ち如や

世の子親もうぬ今の言も家

ホト氏羽

名系りいづく鳥や子親

羽原氏忠之

りやうてたきとちかし杜宇

聖古仁有

耳の穴老梅やうつむは懸尾

おこあ 桑藤昌のふ

口げもと河よあまふとさす

藤原貞用

越犬の言くら木に杜鵑

山田法成

耳よとまれくもあれし時鳥

雞波言

とあやうむし久せ一声時鳥

三木光貞

初声や吾人生何ほとせん

板井氏記翁

なすしてとんて騷騷え時鳥

山田氏法本

ものおもも耳あらぬえ時鳥

一善斎新井中

日ちの中ち知しほとせん

曲院新有中

名あ久ん目志の耳つふれ時鳥

竹屋重辰

鼻息をぬく斗えほとせん

宇高如堂

一声やもつえおもへも時鳥

村山幻則也

侍このむといふえほとせん

依木舟中

鴉吟や一念み教起郭公

柏木源五

耳のぬの定規けりきあ杜宇

大おと煉

雨やらの音を携すりや子規

九河のふた

諸鳥皆あけのふとく 蜀魄

兼加藤彦

やよもや有をまをせぬ時鳥

上昭和序

時鳥つゝあにのふとくあはせんか

羽吟法師

ほろろみあるをれやまの杜宇

まおのり孝

思焼やおあやまおのほとん

霊山長家

あよもむも大るよあつそ杜宇

一時行惟中

きんを猿あつらふとて部は

あめ息やほつとて子規

植田 素門不明

開闢よりけつ田くしあめく下

五月雨 前川由平

五月雨まむ駕も釣の小舟は

藤田不琢

も下踏て海成れすや五月雨

あ冷と息取

羽吟法師

あ冷のえあけぬ間や五月雨

小豆詔友心

望むる目くらみ杖や春日雨

堀氏正詩

長きうらぶむきつき有ぬ

市お洗丸子

ほめ流りくまぬやつゆの雨

ちと尾義陳

雪にけをや<sup>夏</sup>笑し梅の雨

伊木正休

をのうをを此時えぬ梅の雨

竹子 市お鉄丸子

さよとむ心ば(なりあ)く竹

橘 宗長法師

橘の香よやうれてぬぬぬ

まき木孝斎

柑類 相教を皆くくらぶの物よ

五月音 加古右仁有

老世者の風よらぬのりり

粽 ちと尾直久

ゆて汁のちぬももぬぬ粽多

市お鉄丸子

枚楊枝あのみか乃粽小

一時好惟中

ゆてのら風やる也あ 粽

競馬 寒河自竹

くわやその時太のる乃取

かき河定の子

勝負は博をゆきゆくくる

於神前 岸なき吉

くわや競馬はまふれお後れ

百合 松尾二休

勤けより鬼のこ桶やゆりの風

茄子 舟と舟科

汁の書やあまはてええま

物あ竹犬

垣カキ見やるもいさの思ふすい

小角豆 今西氏

なまより子らけ汁らけ垣

瓜 伊木氏二休

とま黄おや黄金のほへ海の瓜

前河由平

ひやして鳥羽に友なきゆくは

江お重治

あつれはうきうきおとあえ初め

難波玄吉

あつれおのあなはつるえ瓜のむ

志賀と直

と物やおもふふ九条瓜

石田氏益水

はる葉もや其在を乱て葉の爪

ふ葉者仲

妙糖もあまむけけりそ自由

金万凡子

爪とひよへんまふきき葉系

神田子次

南北もむく世界なり東寺爪

梅翁清一

東ち爪や南がらよむいてり

隠者定秋

むくのふれくこぬる爪小

岡村常氏及々公の梁息

控に依散身なり家乃

風つせりふ事を祝して

一時形惟中

はる葉の及やまにぬ筋志葉

蚊 舞羽心法中

あひ借るをふくく人の故を爪

岳本統及

ふれにめよる故もくぬ紙帳外

一町好ま真行

粉河次末

宿とまのくく海く故也夕館

宥利の在

やあれ故庵ちよよの社うりな

お上梅友

友を故の時を好ぬ紙帳は

山に氏時非

よや知識を能を求ふ枕故屋

木畑定直

上あよよこおりせざる故帳は

平井金真

ちのあれやわもある故帳は

坂部胡方

むす家の故やもつこの中は

より由光を

鬼故よくしゆてやぬちき涼床

藤原言周

故を火をふやいよのぬ番太郎

糸原景約

をう屑の故とりのまぬ乃中焼也

よみ人石也

鬼故せのうせりくのゆあへあ

虫 西山梅海

水をよ付とまれりかゝるぬ

江戶紅雲集

五石屋やいほ釜くちとよや



志をよぶ也

とよ虫尻やけ猿のゆるりぬ

紫の紫乃風や虫乃火ぬ竹

三橋吉道

光陰も矢のやとやとやと

あはれにぞ

虫もむねばりや火りとも月

金巻地蔵

親の親ゆつちをよのひほこ

お神社真行

一丈竹月

虫はむみやしくいふぬ

山田氏法成

浪のあやとよ虫もやひらめん

有松文松子

畑の上よ光やまあつとよ虫

逸見和玄

さちちりんとんかたれはほこ

井上と計

まへ尻もあまの〜火の虫う

河合瓢中

とよ虫草の葉やお火油

有利可尋

物を好むよしの語をよぶ

竹屋を辰

みくろねや電光ちよちりとも虫

追悼 曲眺水有中

引寄せよすしきとふあなる

羽谷才里駒子

えねねうそ尻のほころふ

純子見貞之

風吹も一雨まねふりたれは

蝉 吉原お中

暑よむいぬいせえへね乃とあ

伊木氏正休

ねえとよすまきまのしんれは

吉山法師

あゝ滝の波はねのうらみいふ

市お鉄丸子

あゝ中の音層きんねのう

海部倍笑

おはげついでねのすみよねの奇

大正元よし

をのつゝねのねや土用がし

若松氏准松

木よあ蝉こけらねとも成よなり

かろ右氏任有

よま秋とろぬやせまのうけもの

鉈

よみ人しん

鉈つる是系竹のあまひか

佐木舟中

すまものふりや也 綱乃鉈

水見つこ

習を曲しおとす名綱の鉈

法家朱木

鉈鉈おもしろいはぬや

お舟痴瓦

あおも又腸をこつらふ

鉄仙を 宥利可石

ちぢられ万里一條の鐵仙を

金浪を 今村義明

利をうてをさるる金浪を

梅テ 丸河の少社

梅りききあめねむの名鉈は

平舟重之

梅りいふをさるるを酢といり

宥利可石

紫穂法やまけてつる梅り

氷餅 伊木氏正休

味ひて古り水や氷もち

今古任有

ひかれて中やとえんおもち

氷室 上田氏家敷

ひらりとあつて月と道は水色に

惟子 山口氏湯也

或<sup>?</sup>や坊の目よみぬ鬼ちこ

明らきよふくさ糸やさう浪

池上元定

はらりゆらりきり <sup>中</sup>ちえより竹

三宅周菴

其はあつきいふするはらり

悪ふとわらふ席まき

多田清玄

あゝをみて急されもあまの布

白雨 平井乾孝

ゆらりややうな櫃から雷の声

おぼろ檀浦

一時好惟中

ゆらりやうらあひはらちふ日か

扇 付出 伊木正休

金箔をいこうとくく扇小

連舟の席さし

里お昌叱

是半風ふ忘れえもち扇

山田清成

風の子乃氏をもちあま

了観は

月、柄、田、工、う、き、う、ら、い、は

有松支枕子

諸方の風下知して身もまぶ

さるゝをえれ

とつしあつてあつてあつてあつて

長たは秀盛

ふふふふふふふふふふふふ

扇もあつてあつてあつて

あつてあつて

坪井正之

ふふふふふふふふふふふふ

一時好帷中

家津との様かきりもあつて

祇花云 梅菊は

京をとりみちや祇花のあひま

野お昌雄

ふふふふふふふふふふふふ

昂喜重は

祇花云やわらふ後うら衣お

ふふふふふ

祇花云やわらふ大車うん

市お鉄丸子

祇花云やわらふあつてあつて

折麦 難波玄士

盛ふ友も消さるややびや麦

伊木正休

すしはにいきのあつきを麦

千代孝仲

友も親月にはやびや麦

沙門玄甫

切麦は海をいとおぬうまはぶ

山口氏明非

切麦やとあつ友伐えれぬ

激藻 岳存胤及

すしあや血のぬりところん

二見一木

水すしは海のやうあるん

前川由一

かじ船や鼻の友あきところん

横内末のり

お味成えん枝のきとやところん

藤原言因

是を水といんとすれるところん

難波玄士

すしあやあつよあところん

栗井氏範孝

水のあつ夜食すしきところん

大平真仍

水鏡面は出は月浪やとろえん

高滝益殿

とろえんわをこく出茶屋の

一時好惟中

はくは白しをまつきあてん

納涼

伊木氏正休

桂系やそりや後のみゆあすこ

秋庭順菴

ぬはくま火もこせよあすこ

とら聖中

口笛もあす庭やゆあすこ

無敵昌のふ

葉子つむやれあすこしゆあすこ

琴引むらさき

佐木舟中

琴の音や風引よせてゆあすこ

わ口好北翁

す風やなぬもよくすろ箒

お定海 一葉好舟中

はすし浪の紋ある水々々は

梅翁けし

すみ床や下には波上を酒

す風の初合のほや淀つづ

益翁

河原すこ是そむむ床の上

凡月ふ信

おもろの河原おもそやすみ床

小見楽業

すみ星や風の吹くもむろ

よみ人不知

戸障子やまの舟はな友をぬ

一時行亭 古の望中

春ふ計家の風おけなはりき

新島定人

流もよや又くあな茶久

懐かき松うらをぬこそ

真行 一時行帷中

おもそまう風やな友をぬ

懐かき佐生山の物もこそ

素めんこそうへて

素めんこそうへてしほの系

一葉好言真行

いすあつこもむら竹まへし定

難友 難波玄吉

赤飯やお茶のしみき非由り

加古仁有

あつこもやお茶あつち麻地酒



はやくお吟

いそがしうらやまのうらやま

い木のうらやま

人をまてきしせにまわりのちか

おのちか

風をいこいちかたのちか

秋山撫文

虫のたのこまのちか

ちか

物とあてつちかたのちか

金万風子

切菓やちかたのちか

一時行よまてははは

目とあてつちかたのちか

丸河のちか

摺粉木やちかたのちか

ちか

紙帳白くまてたのちか

塩見同矢

麴をやくちかたのちか

伊木氏正休

おのちかたのちか

おのちか 石田益水行

おのちかたのちか

藤原貞周

矢敷もまゝいもちんがりうふ

花河のふ祐

陰成しはくくそくす麦

言滝益お

天<sup>つら</sup>草も里ま落くる八百屋い

山口氏徳也

削てりす白深いおれのま砂は

大木松えを

皆<sup>垢</sup>垢乃<sup>垢</sup>姿あうすや玉乃汗

水田氏西吟

暑き日や火宅の門乃鬼<sup>く</sup>う<sup>う</sup>

昭而丁三、八、六、位令

